

知識基盤社会におけるICT教育の重要性

宮城教育大学長 見上 一幸

現代は知識基盤社会といわれ、情報に溢れ、身の回りには多量の情報が猛スピードで行き交っている。誰でも簡単に世界に向けて情報を発信でき、得たい知識、情報は Web を通して瞬時に得ることができることもあって、その情報は常に真実とは限らないことにも留意すべきである。それらの中から正しいものを選び、真に理解した上で自分自身のものにしなければならない。学校教育においても一層情報リテラシーの教育が重要な時代である。そのような理由から、本年度の重点教育研究として英語教育、キャリア教育と並んでICT教育を加えた。すでに子どもたちはたいへんデジタル化の進んだ世界に住んでおり、児童生徒の学習意欲や学力の向上のためにも“教員のICTを活用した学習指導力の向上”が喫緊の課題となっている。したがって、これから教員を目指す学生に、教育実習を始めとして積極的にICTを使用した実践的な指導の機会が不可欠となった。

ICTの基本的な環境として、情報処理センターの先見性により、宮城教育大学にはすでに青葉山キャンパスのみならず上杉キャンパスにも無線LANが整備されていた。しかし、昨年春まで本学附属学校には電子黒板の設置がなく、公立学校よりもICT教育環境整備が遅れた状況であり、学生教育においても電子黒板等ICT機器の実践的な活用が十分ではなかった。大学では本年度にICT教育を推進することを決め、電子黒板の導入を図った。これを機会にICT活用の実践的な研究を進めるために、文部科学省生涯学習局の支援もあって、授業公開をすることになった。附属学校の積極的な取組によって、昨年10月、附属学校を会場に「全国生涯学習ネットワークフォーラム（ICT分科会）」が開かれた。一般の学校の関心も高く、全国から延べ千人を超える参加者があった。このフォーラムでは、ICT教育の実践を開始してわずかしか準備期間のない中で、附属の先生方の見事なICT実践が披露された。このことはICT機器に慣れて器用に扱えれば質の高いICT教育ができるわけではなく、日頃のしっかりした授業研究の上にICTの良さが活きることを示した。子どもたち全員がタブレット端末を持ち、デジタル教科書で学習する時代を目前にして、教室や子どもの状況を考えた上で、どのような場面でどのように導入すべきか、しっかりした検討が重要である。

ICT化により教育の可能性として“得る面”と“失う面”があるような気がする。この両面から慎重に進めなければならない。溢れる情報の中から、自分にとって必要な情報を選択し、活用することが重要である。自己のものとするためには、取得した情報について、すでに獲得した知識と経験を基にクリティカルに捉え、捉えた知識をシステム化し、自分の考えの全体に組み入れる。その後、自分の意思決定に活用し、行動に反映させるというプロセスである。ICT一辺倒でなく、フリーハンドで文字や絵を描くこと、チョークを手に黒板に書くことが基本と考えるべきである。“本物を体験し、感じることの大切さ（五感を使った教育）”も大事であり、人と人とのコミュニケーションにおいて Face to Face の関係、Heart to Heart の関係が基本である。

今後は、学校現場における各教科等における効果的な指導方法の開発、校務の効率化や学校経営の改善などにICTを活用していきたい。そのためにはICT環境の整備を進め、情報処理センターの機能と図書館機能の有機的な連携、教育研究センターや学内の教育資源のデジタル化等も進める必要がある。ICT化を進めることによって、本学のような小規模大学がCOC (Center of community) として地域に貢献し、教育現場との情報の往還により教育現場の課題、被災地の教育復興に貢献することができると思う。

(2013.2)